

巻頭言

かつて日本では感染症の治療と制圧のため抗生物質の開発が盛んであったが、現在は多くの製薬企業が開発から撤退し、抗がん剤や消化器系、精神・神経系の疾患治療薬など利益の出やすい薬に開発の中心が絞られる傾向にある。これは医薬品開発に膨大な研究開発費がかかる等、費用対効果の問題が大きいことによることは理解できるが、一方で今後感染症は我が国においても顧みられない病気になるのではと危惧するのは筆者だけであろうか？世界に視点を移せばマラリア、HIV、結核や最近話題となっているエボラ出血熱やジカ熱ばかりでなく顧みられない熱帯病 (Neglected Tropical Diseases : NTDs) など種々の感染症がいまだに発生しており、地球規模の感染症対策が重要である。NTDsは現在WHO (世界保健機関) により20種が指定されており、世界で10億人に上る患者が治療薬の開発と提供を待っている。その多くはアフリカや南米、インドなどの途上国で流行している感染症であるが、利益が得られないため製薬企業による通常の開発は困難である。Drugs for Neglected Diseases *initiative* (DNDi) は、顧みられない病気の治療薬開発を目的とした非営利の国際医薬品開発パートナーシップ (Product Development Partnership : PDP) 機関として2003年7月に開設されたもので、世界中の産官学機関とのパートナーシップを通じ、治療薬の開発を行っている。

これに先立つ2002年11月に翌年DNDiの初代理事長となる当時フランスの製薬企業の重職にあったYves Champey氏 (医師) が、当時「国境なき医師団」にいた平林史子氏と共に北里研究所を訪れた。当時研究担当理事として大村 智所長の下で働いていた筆者はDNDiが近く設立されることや北里研究所との治療薬探索の共同研究の要望等について伺った。この出会いはまだ設立前であったが筆者とDNDiの最初の出会いであった。当時、すでに北里研究所の大村 智所長は米国メルク社のWilliam C. Campbell博士らと共に2015年のノーベル生理学・医学賞の対象となったNTDsのオンコセルカ症やリンパ系フィラリア症に著効を示すイベルメクチンを発見・開発し、WHOを通じその制圧プログラムにも成功していた。またWHOと厚生労働省、製薬企業が連携し、マラリアの治療薬を企業の保有する化合物ライブラリーから探索するJPMWプロジェクトのスクリーニングを北里研究所が担当するなど、熱帯病の治療薬探索にも関わっていた。そのような背景からYves Champey氏からの協力要請の受け入れは北里研究所としては当然なことであった。当時外資製薬企業を率いていたChris Brünger氏 (医師) はボランティアとしての時間を割き、平林史子氏とともにDNDiの開設時からそのコンサルタントとして、ジュネーブ本部と協議しながら日本国内での基盤構築と産官学へのDNDiの理解のため尽力していた。

DNDiの設立から2年後の2005年に本誌 (臨床評価 Vol.33, No.1) で「ネグレクトド・ディーズのための新薬開発：基礎から臨床へ」の題目で、当時DNDiの初代研究開発本部長で

あったSimon L Croft ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院教授、アフリカ睡眠病治療薬候補としてアスコフラノンの開発を精力的に進めていた北 潔 東京大学大学院医学系研究科教授（当時）、DNDiの平林史子氏とChris Brünger氏、北里研究所熱帯病研究センター長の乙黒一彦博士、筆者をメンバーに座談会を開き掲載していただいた。この当時は国内の製薬企業においてもDNDiの目的を理解して前向きに協力いただけるところは限られており、特にNTDsに対する研究資金の確保が大きな課題であったが、座談会では諸課題と共に将来の夢なども語られた。

この座談会から13年が経過した今日、NTDs治療薬開発をめぐる国内外の環境は一変したように感じられる。これには世界の大手製薬企業13社、世界銀行、支援国、ビル&メリンダ・ゲイツ財団などの寄付団体、感染流行国の保健省、DNDi、WHOからの代表が一堂に会し、NTDs制圧の声明を出した2012年のロンドン宣言が出されたこと、世界に類がない我が国の官民ファンドとして、マラリアやHIV、NTDsに対する治療薬やワクチン開発などを支援するグローバルヘルス技術振興基金（GHIT Fund）が2013年に設立されたことにより、日本の産学によるNTDs治療薬開発が大きく動き出したこと、NTDs治療薬のイベルメクチンの発見と開発に対して大村 智北里大学特別荣誉教授が2015年のノーベル生理学・医学賞を受賞されたことによりNTDsに対する社会の理解やその開発の意義が認知されるようになったこと等が、NTDs治療薬開発への理解に効果的に働いたことが大きいと考えられる。

この度、臨床評価誌の企画として、Simon L Croft 教授の来日の機会に当時とほぼ同じメンバーが一堂に会してNTDs治療薬開発についてのこれまでと現在の課題を検証し将来を展望する座談会が実現した。特にSimon L Croft 教授には国際的視点からの13年間の変化について、北 潔教授にはこの分野に関連した日本の研究支援体制の動きなどについても詳細にお話しいただいた。

DNDiのようなPDPを介した医薬品開発は、NTDsのみならず広く利益の出にくい対象の医薬品開発においても、今後のモデルの一つとなることが期待される。本号に収載されている座談会記事が日本発のNTDs治療薬開発を加速させるとともに、NTDs治療薬開発に関心を持たれる方の一助となることを期待するものである。

山田 陽城
北里大学名誉教授
東京薬科大学客員教授
特定非営利活動法人 DNDi Japan 理事長